



1997. 10. 14

速報 モンゴルフィールドワーク



↑大草原の中のゲル（モンゴルの円形テント）

←草原の中で馬頭琴を演奏するモンゴル人

楽器博物館では楽器を展示するだけでなく、楽器を取りまく様々な情報も提供していこうと思います。なぜなら展示品は、日頃私たちが見慣れている楽器ばかりではないからです。私たちの日々の生活では、ヨーロッパの楽器や音楽を聴いたり、見たりする機会は多いので、その楽器の奏法や音色はよく知っています。ところがアジアやアフリカ地域の楽器や音楽はどうでしょう。そうした地域の音楽に接する機会は少ないのではないのでしょうか。

そこで写真やビデオを現地で収録し、それらを発信していこうというのがフィールドワークの大きな目的です。つまり楽器がいつ、どこで、どんな奏法で、どんな音色で演奏されるのか、また楽器の材質、紋様、伝播経路などを取材し、その情報を来館者に提示していこうというものです。この対象地として、今年度はモンゴルを選びました。モンゴルというと「スーホの白い馬」、「馬頭琴」、「チンギス・ハーン」、「旭鷲山（きょくしゅうざん・カ士）」などを思い浮かべたり、大草原にゲル（丸形のテント）があり、遊牧民が馬に乗って悠久の時間が流れているイメージを持つ人が多いと思われます。

私たちがこの調査地にモンゴルを選んだ理由は2つあります。1つはシルクロードの北の端で、かつてはトルコなどの中東諸国に支配された国であり、中東の古い型の楽器やそれにまつわる伝承などが残っているのではないかとということ。2つめはこれまで社会主義体制（1990年に無血革命で民主主義体制となる）であったため、西欧の影響をあまり受けておらず、またモンゴル国内の伝統音楽に関してもほとんど未調査であったからです。

8月2日午後3時、関西空港からモンゴル航空でウランバートルまで直行便で4時間。ルートは黄海（朝鮮半島と中国大陸の間）を北上し、万里の長城を横切り、ゴビ砂漠の東を通ります。午後7時すぎ、ウランバートル空港へ到着。ホテルまで行く途中に気づいたことを少々。まず道路に側溝がない（遊牧中の山羊や羊や馬の邪魔になるから）。高い山はないが高いところにいる感じ（ウランバートルは標高1350m）で長野県のハケ岳のような風景。

さあ明日からは市内を離れ、いよいよ音楽文化の収集です。乞御期待！！

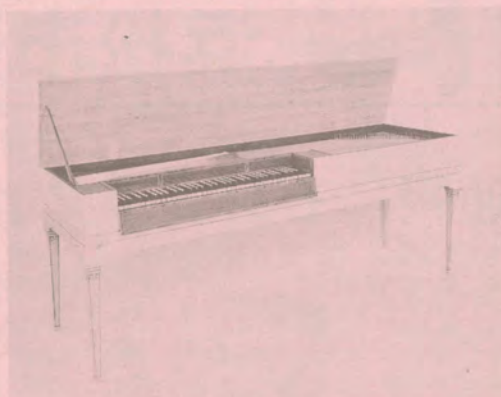
事業報告

■レクチャーコンサート第14回「静寂との出会い～極小の音響・クラヴィコードの魅惑～」

7/12(日) 14:00～15:45 研修交流センター21音楽セミナー室

出演：宮本とも子さん(フェリス学院大学助教授)

クラヴィコードはヨーロッパで14世紀から19世紀の始めまで愛用された小型鍵盤楽器。特に17世紀以降はオルガンの盛んなドイツで教育用、オルガニストの練習用として普及しました。キーを押すとマイナス・ドライバーの先のような金属片が弦を打ち鳴らします。音はとても小さく、静かな場所で全身を耳にして聴かなければなりません。時計の音も気になるくらい繊細な音ですが、その表情は極めて豊かで、バッハ、ハイドンなどの大作曲家も愛奏しました。近年ヨーロッパでも盛んに研究・演奏されていますが、まだまだ聴く機会の少ない幻の鍵盤楽器です。コンサートでは世界的に活躍しておられる宮本とも子さんを迎え、数世紀にわたる鍵盤曲をそれぞれの時代様式で演奏し、独特の指使いなど興味深いお話をいただきました。いつもはピアノやハーブシコードで聴くC.P.E.バッハやハイドンなどの曲が、真珠のような静かな輝きを持った全く別の作品に感じられ、心の奥にしみ入るすばらしい音を体験できました。



クラヴィコード(当館所蔵品)

■夏休みワークショップ「楽器を作ろう」

7/29(火)～8/10(日) 楽器博物館第3展示室

夏休みワークショップは小学生を対象に身近にある素材(紙やストロー、木片等)を使って楽器を作りながら、音の出るしくみや、わずかな工夫で素材を楽器へと変化させる楽しさを知ること、楽器を身近に感じてもらうと昨年から継続して行っているものです。今年は、昨年大好評だった「せみ」(水道管、トレーシングペーパー等を使用)の他に、せみと同じしくみによる「かえる」(紙コップを使用)、同じく振り回して音を出すがしくみの全く異なる「びよびよ笛」(フィルムケースを使用)、ストローにはさみで切り込みを入れただけの「ストロー笛」、折り紙の「マラカス」、木片を並べた「木琴」を教材として用意しました。夏休みの自由研究の1つにしようと張り切る小学生はもちろん、付き添いの大人達も熱心に楽器作りに挑戦し、音が出た瞬間、何ともいえない笑顔を見せていました。



ワークショップで木琴を作る子供達

■講座 シリーズくらしと楽器

「楽器の中の絵画」 講師：田辺 清さん(大東文化大学助教授)

7/5(土) 14:00～16:00 研修交流センター401会議室 参加者29名

楽器の中の絵画の内容や描法から、製作地や製作年代等を検証しました。

■見学会「音さがしの旅」

7/25(金) 9:30～11:30 参加者23名

浜松駅周辺の音を探し、私たちの身の回りの音環境について再認識しました。

■小展示「クラヴィコードの時代」

6/26(木)～7/21(月)

クラヴィコードが盛んに使われた16世紀、日本は初めてヨーロッパと直接出会いました。当時の日本、ヨーロッパの社会や音楽の状況、交流の様子などを紹介しました。



見学会「音さがしの旅」

■小展示「ワークショップの楽器」

7/29(火)～8/31(日)

夏休みワークショップの教材と、そのもとになった楽器との比較展示をしました。

フィールドワーク旅行記

モンゴルといえば果てしなく広がる大草原を思い浮かべてください。しかしそこには我々の知らない未知の世界も果てしなく広がっています。ここではモンゴルにまつわる豆知識を紹介します。

- ・主食は羊肉、牛肉、ヤギ肉。内臓も含めすべて食べる。血も含め捨てることは全くない。
- ・広大な草原に水道はない。水の代わりに馬乳酒を飲む。
- ・馬乳酒は馬の乳を自然発酵させた（つまり腐らせた）飲み物。アルコールは4~5%で味は極めて酸っぱい。
- ・モンゴル人にとって馬乳酒は貴重な水分源。来客者にも当然ふるまう。どんぶりにあふれるほどついでくれる。
- ・普通の日本人がこれを飲み干せば当然数時間後にはトイレに直行。下痢との格闘となる。
- ・ふるまわれた馬乳酒を残すとその家に不幸が訪れると信じられている。相手の気持ちをとるか、下痢との格闘をとるか厳しい選択だ。
- ・遊牧生活の彼らは野菜など作らない。ひたすら肉のみを食す。野菜から採るべきビタミンはすべて馬乳酒から採る。
- ・肉とならんでチーズは重要な食物。甘いものから酸っぱいものまでその種類は非常に多い。
- ・おやつに食べるウルムは馬乳酒を温めて表面にできた膜を何枚も重ねたクレープのようなもの。日本人向きで結構おいしい。
- ・草原に走り回っているタルバガンという大型のリスは非常に珍味。そのすばしこい足のためモンゴル人でも捕らえるのは困難。
- ・捕らえたタルバガンは1か所も破らないで服を脱がすように毛皮だけをとる。そして衣類となる。
- ・羊を殺すときは動脈を強く握り、苦しめないで殺すのが羊に対する礼儀らしい。
- ・草原の中にトイレなどない。男も女もすべて野外で用を足す。見られることに何の抵抗もない。
- ・モンゴルはそのイメージと違い以外と寒い。真夏の平均気温は17度、冬は-40度にまで達する。
- ・総人口は約230万人。そのうち1/4の約57万人が首都ウランバートルに住む。
- ・国土面積は156.7万km²、日本の約4倍の広さ。首都ウランバートルは2,000km²で他は大半が草原。
- ・人口密度は1km²あたり1.35人。総世帯数は約11万、そのうち半数以上がゲルという円形テントに住む。
- ・現在のモンゴルは超インフレ状態。91年~95年にかけて物価は約20倍にはね上がった。

次回に続く

収蔵資料の紹介

■馬頭琴

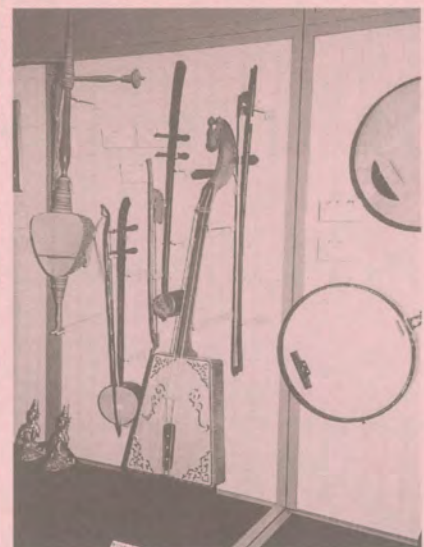
弓で弦を擦って音を出す楽器といえば・・・オーケストラに登場するヴァイオリンやチェロなどが最もよく知られているでしょうか？これから紹介する馬頭琴も弓奏の弦楽器です。

弦楽器を演奏するために弓を使い始めたのは、10世紀頃からはないかといわれています。棒をアーチ状にしならせた両端に馬の尾や、馬以外でも糸状の素材を渡して、弓としていました。現在、馬頭琴の演奏に用いられている弓は、写真のような形で、弓毛には、ヴァイオリン等と同様に馬の尾を用いています。

本体は、台形の胴に棹が貫通しており、「馬頭琴」の名のとおり楽器最上部に馬の頭が彫られています。弦は2本で、胴の表側に2つの響孔がついています。しかし、こうしたスタイルになったのは比較的新しく1900年代に入ってからです。当初は、胴の部分がオタマジャクシのような形をしていましたが、その後現在のような台形になりました。この時点で楽器最上部には竜などが彫刻されていました。その後、棹の最上部に馬の上半身の彫り物が付くようになり、いつ頃からか馬の頭部のみになったといえます。また、馬頭琴には一見f字孔のような響孔が付いていますが、これは本来、陰と陽を表し、魚の雄と雌が口を合わせた形ということです（モンゴルフィールドワークで得た情報）。

演奏は、胴を膝の間に挟んで少し楽器を斜にして構え、右手で弓を持ちます。左手は弦に触れて、音高を変えたり、ヴィヴラートをかけたりします。音高の変え方には2通りあり、指の腹で弦を上から押さえる方法と、爪の根元を弦の下側から押しつける方法があります。また、指を弦に触れたまま上下にゆらしたり、弦を強く棹側へ押し戻したりを繰り返して、ヴィヴラートをかけます。

馬頭琴は独奏のほか、歌の伴奏、合奏などに用います。昨今では、チェロやコントラバスほどの大きなものも作られ、異なる音域同志の馬頭琴を用いたアンサンブルも行われています。



馬頭琴（中央）

これからの事業スケジュール

事業名	開催期間	内容
企画展「世界の太鼓」	9.30(火)～10.26(日)	人間に最も身近な楽器「太鼓」の数々を紹介します
レクチャーコンサート「打楽器東西比較考」	10.18(土) 14:00～	日本、アジア、アフリカ、南米等世界の様々な打楽器の紹介と演奏です
講座 シリーズくらしと楽器「知恵の器としての楽器」	10.26(日) 14:00～	アフリカを中心に楽器と人の関係について考察します
セミナー 楽器の中の聖と俗「水琴窟とシシ威し」	11.1(土) 14:00～	水琴窟とシシ威しを例に日本人の感性を探ります
小展示「馬頭琴の国モンゴル」 ～フィールドワーク速報展～	11.15(土)～12.26(金)	8月に行われたモンゴルフィールドワークの成果の一部を紹介します
講座 シリーズくらしと楽器「モンゴルの自然と暮らしと歌」	11.29(土) 14:00～	モンゴルの暮らしと民謡「オルティン・ドー」を紹介します
セミナー 楽器の中の聖と俗「日本の民俗音楽—チンドン」	12.6(土) 14:00～	チンドン屋さんの音楽の変遷や古今の比較をします
レクチャーコンサート「馬頭琴」	12.13(土) 14:00～	モンゴルの代表的な楽器「馬頭琴」の解説と演奏です
展示室ガイドツアー	毎月第2日曜日	学芸員が展示品の解説をします
ミュージアム・サロン	毎月1回 日曜日	学芸員による楽器文化ワンポイントミニ講座です

7月～9月までのあゆみ

6/26(木)～7/21(月)	小展示「クラヴィコードの時代」
7/5(土)	講座 シリーズくらしと楽器「楽器の中の絵画」講師：田辺清さん
7/12(土)	レクチャーコンサート「静寂との出会い」出演：宮本とも子さん
7/13(日)	展示室ガイドツアー「鍵盤楽器の歴史」
7/23(水)～8/3(日)	博物館実習
7/25(金)	見学会「音さがしの旅」
7/27(日)	ミュージアム・サロン「能管」
7/29(火)～8/31(日)	小展示「ワークショップの楽器」
7/29(火)～8/10(日)	夏休みワークショップ「楽器をつくろう」
8/2(土)～8/9(土)	モンゴルフィールドワーク
8/3(日)	ミュージアム・サロン「ストロー七変化」
8/10(日)	展示室ガイドツアー「鍵盤楽器」
9/13(土)	セミナー 楽器の中の聖と俗「音楽を聴く微生物」 講師：西岡信雄さん
9/14(日)	展示室ガイドツアー「リップリードの楽器」
9/21(日)	ミュージアム・サロン「打楽器いろいろ」

7～9月の観覧者数

大人	個人	15,773
	団体	2,630
中人	個人	418
	団体	157
小人	個人	3,762
	団体	1,027
幼児		1,148
合計		24,915

利用案内

開館時間：火曜日～日曜日 午前9：30～午後5：00
 休館日：月曜日（祝日にあたる時は開館）、祝日の翌日、年末年始、
 その他資料整備等のために定める日
 —祝日前後の開館日については、変更することがございます
 ので当館にご確認下さい。—

観覧料：	個人	団体(20人以上)	団体(80人以上)
大人(大学生以上)	400円	320円	240円
中人(高校生)	200円	160円	120円
小人(小・中学生)	100円	80円	60円

※館内には、貴重品以外のお荷物は持ち込みできません。

浜松市楽器博物館だより

1997年10月14日発行

No.9

編集 浜松市楽器博物館
〒430 静岡県浜松市板屋町108-1

TEL 053-451-1128

FAX 053-451-1129

印刷 株式会社 シバプリント